様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５９０

研究課題名（和文）創造的逸脱表現を支える文法のしくみ：言語使用のインターフェイスと言語変化

研究課題名（英文）Innovative Deviations in the System of Grammar: Interface of Language Use and Language Change

研究代表者
鈴木　亨（Suzuki, Toru）

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：７０２１６４１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：言語の創造的逸脱表現は、文法の制約と言語使用のはざまで生じる。本研究は、創造的逸脱が認可される条件を精査し、言語使用のインターフェイスにおいて創造性が発揮されるメカニズムの解明を試みた。主に見せかけの結果構文と、活動動詞に形容詞が補部として後続する拡張用法について考察した。前者は、描写対象が変化動詞を伴う「変性事象」に特化されており、文法特徴として、叙述関係のミスマッチと副詞的修飾関係があることを示した。後者については、関連表現の精査から、関連する語彙や文法（用法）の複合的ネットワークに位置づけられることにより、「英語らしい言い回し」として言語生態学上の居場所が与えられていることを示した。

研究成果の概要（英文）：Innovative deviation in language arises through the interaction of grammar and language use in actual contexts. This study attempts to explicate how various linguistic factors can contribute to innovation of creative linguistic expressions through examination of lexical and grammatical licensing conditions at the interface of syntax, semantics and language use. Two distinct constructional objects, (1) the spurious resultative construction and (2) the extended use of some activity verbs with adjectival complements, are mainly examined. It is shown that the former construction is specifically employed to describe “transformation events” with two grammatical peculiarities, namely, (a) mismatch in predication, and (b) adverbial modification. In the latter, it is shown that the extended use of the complement pattern can be given its own ecological niche in the complex of several related constructions and expressions as “a fashion of speaking” in English.

研究分野：英語学

キーワード：創造的逸脱　文法　構文　意味解釈

１．研究開始当初の背景

言語に見られる創造的逸脱表現は、文法（主に統語論と意味論）の制約と現実の言語使用のインターフェイスに生じ、さらにはそれが言語変化のきっかけにもなるとも考えられる。

従来の研究では、創造的表現がいかにして生じ、認可されていくのかという言語の動的プロセスについて、言語使用の実態に照らして文法と言語のしくみを考察するという視点を共有するアプローチは、理論の枠組みにかかわらず、十分開拓されてきたとは言えない。

本研究は、言語使用における創造的逸脱表現の発現と容認を支えるメカニズムを理論的研究の枠組みの中に位置づけるとともに、逸脱から言語変化へ至る動的なプロセスを理論的に記述しようという試みである。

２．研究の目的

本研究は、英語の創造的逸脱表現が発現し、認可される条件を精査し、文法と言語使用のインターフェイスにおける逸脱と創造のメカニズムを明らかにすると同時に、そのような逸脱が容認され、当該言語の文法システムの一部に組み込まれていく動的プロセスを支えるその背景となる文法（＝言語知識）のあり方について考察することを目的とする。

具体的な分析対象としては、従来の結果構文分析において例外的な扱いをされる傾向にあった「見せかけの結果構文（spurious resultatives）」（Washio 1997）と、近年のインターネット等のメディアにおけるインフォーマルな文体の急速な一般的普及とも関連づけることが可能であると思われる、活動動詞の補部に例外的に形容詞が生じる拡張用法を中心に取り上げる。

３．研究の方法

主に(1)「見せかけの結果構文（spurious resultatives）」（Washio 1997）と(2)活動動詞の補部に形容詞が生じる拡張用法について、関連する各種事例の調査を通じて、当該表現の成立メカニズムと認可条件を明らかにする。調査にはコーパスと文献資料を併用し、特定語彙に焦点化し、関連表現の収集を進める。理論的な分析においては、いわゆる学習文法や伝統文法の知見を確認しつつ、とりわけ後者の活動動詞補部における形容詞の拡張用法に関しては、語彙意味論や構文文法などに基づく理論的考察に加え、メンタル・コーパス（mental corpus: Taylor 2012）的な視点、すなわち、従来の「辞書＋文法書モデル」を批判的に捉え、言語学習者がこれまでに遭遇した言語体験が、文脈情報までをも含めてすべて蓄積された記憶の総体（＝コーパス）を「文法」としてみなす立場から、英語話者の言語知識の実態をより正確に反映した説明を試みる。

４．研究成果

(1) Washio (1997)における結果構文の類型論的な分析においては、「強い結果構文（strong resultatives）」と「弱い結果構文（weak resultatives）」の二分法が提示され、英語においてはその両方が利用されていることが広く明らかにされた。その一方で、結果構文の二分法に対する例外的なカテゴリーとされた「見せかけの結果構文（spurious resultatives）」は、いくつかの特徴が指摘されるにとどまっていた。

本研究では、「見せかけの結果構文」の特徴を精査し、当該構文の描写対象となるのは、いわゆる変化事象の中でも特定の変化動詞を伴う「変性事象(transformation event)」に特化されていることを指摘した（「見せかけの結果構文」を含む結果構文の類型論的な分類については、Iwata 2006 も参照）。「変性事象」においては、変化主体を構築する物理的特性の一貫性が損なわれ、その結果として、事物の指示に関して多義性が生じるのが特徴である。

さらに、この構文に見られる文法的特徴は、(a) 叙述関係のミスマッチ（predication mismatch）と (b) 副詞的修飾関係（adverbial modification）の 2 点に集約できることを明らかにした。構文の意味解釈の面においては、叙述関係のミスマッチは、解釈理論における一般操作であるタイプシフト (type shift) の適用に基づく意味強制（coercion）によって、ミスマッチが解消され、適切な解釈が導かれるという分析を提示した（タイプシフトを含む日本語の結果構文の分析については、井本 2009、宮腰 2009 らの先行研究も参照）。Washio 1997 でも指摘されていた、見せかけの結果句に特徴的に見られるいわゆる副詞的な特性は、このタイプシフトに基づく意味強制に起因するものであると考えられる。

本研究の帰結として、「見せかけの結果構文」は、「弱い結果構文」を理論的に定義し直すことで、その分類に１つのタイプとして含まれることになり、もう一方の「強い結果構文」と対比されるものと特徴づけることができる。また、当該構文が適切に解釈されるためには、日英語ともにタイプシフトに基づく意味強制が関与していることは、言語類型論的観点からも興味深い事実である。

(2) 活動動詞の補部に形容詞が生じる拡張用法について、文法的な逸脱が発現する背景と、それが創造的革新（innovation）として容認されていくプロセスに関わる条件について考察を進めた。

事例研究として、1997 年に Apple 社の宣伝広告で使われた“Think different.”という表現に焦点化した（cf. Isaacson 2011, Pinker 2014）。この表現は、標準的な英文法の体系に照らしてみると、動詞 think と形容詞 different の組み合わせが文法的に不透明であり、何かしら逸脱性を感じさせる。その解釈や文法性をめ

ぐっては、専門家も含めて賛否両論の議論があるが、英語圏においては、口語的でインフォーマルな表現（スローガンや宣伝文句など）としては、相応に受容されつつあるようである。

本研究では、当該表現が容認されるに至る背景には、関連する語彙や文法（用法）の複合的ネットワークがあり、その中に適切に位置づけられることにより、この表現が「英語らしい言い回し」（cf. 西村・長谷川 2016）として言語的生態学上の居場所（ecological niche）を与えられているという分析を提示した。

まず、当該表現における形容詞形の different を単に-ly 形の副詞 differently の異型と分析することの問題点を指摘した上で、副詞的用法を発達させた形容詞 same の文脈的な反意語としての different の意味特性、さらに限定的な用法において慣用的に副詞的特性を示すと考えられる different のいくつかの語彙特性について考察した。

一方、本来的には前置詞 of や about を伴う自動詞用法を基本とする think であるが、同族目的語構文に加えて、限定的な条件の下で名詞句補部をとる「疑似他動詞用法」（e.g. Think victory./Think beauty.）について、talk などの動詞の類例を含めて精査した上で、その補部が「引用実詞（quotation substantive）」を担う位置として慣用的にミニ構文化されている可能性について検討した（cf. Boas 2003、安井 1976）。ただし、この「引用実詞」分析が妥当であるとしても、それはあくまでも think が名詞句補部をとる、いわゆる例外的な他動詞用法に関するものであり、形容詞補部が生じる事例に対して、現段階で直接適用できるというわけではない。

続いて、先行研究である Horton（1996）、Killie（2007）、谷口（2005）らに基づき、SVC 形式をとる知覚構文から属性評価文への（歴史的）発達プロセスにおける、もう１つの発展形として think タイプの動詞と形容詞の組み合わせからなる拡張用法を位置づけた。さらに、早瀬（2008）による形容詞を伴う命令文の形式において、命令形動詞の「非時間的（atemporal）」かつ「非実現的（irrealis）」なムードと、形容詞の本来的な状態性志向による結果解釈（Be + Adjective）が、構文レベルのブレンディング（blending: Fauconnier and Turner 2012）を通じて生じるという分析を援用しつつ、関連表現の複合的な参照ネットワークに支えられて、当該表現の多層的意味解釈が生じていることを示した。

関連して、think と同様に、形容詞を補部とする逸脱的な用例が観察される活動動詞は、いずれも日常的な基本動詞であるだけでなく、身体活動等の様態を通じて、主語である活動主体（の内面）が周りから評価されやすいという意味的特徴を共有するものであることを、コーパスや文献から収集した関連動詞の用例との比較から明らかにした（類例は、例えば talk や act などの動詞に多く見られる）。

本研究における逸脱表現の認可を関連表現の複合的なネットワークに位置づける分析は、一般的な規則の体系という文法観から離れた、個別の語彙における体験的な用法の総体としての文法知識というメンタル・コーパス（Taylor 2012）の言語観に呼応するものである。

メンタル・コーパスとしての言語知識（＝文法）は、言語学習者がこれまでに遭遇した言語体験が、文脈情報までも含めてすべて蓄積された記憶の総体（＝コーパス）である。たとえ無意識的な記憶の痕跡であれ、我々の言語使用は、発音や文法の細部にわたってそのような「知識」によってコントロールされているという Taylor らの主張は、従来の「辞書＋文法書モデル」への対案となる言語観・文法観として近年注目されているところである。

本研究で明らかにされた“Think different”という表現が、当初は逸脱的に発現し、やがて創造的な表現として容認されていく背景には、動詞で名指される活動の表出を通じて、その主体がその内面を外部から評価されやすい行為を表す基本動詞の１つである think と、語彙解釈上 same と反意的に位置づけられ、インフォーマルな文体に限定的ながら一定の副詞的用法を獲得しつつある different という特定の形容詞からなる組み合わせが存在している。

この組み合わせが、SVO 形式の拡張的用法として属性評価文を構成するに至るのは、必然とは言えないまでも、全くの偶然というわけでもなく、一定の妥当性のあるいわば潜在的なガイドラインに沿ったものであるとみなすことができる。言い換えれば、当該表現は、それを構成する語彙が慣習的に獲得した特性と用法の複合的なネットワークの中に位置づけられることによって、１つの「英語らしい言い回し」として、言語的生態学上の居場所を占めることができるようになったといえる。

メンタル・コーパス的な観点からは、言語においては様々なレベルのイディオム的表現（の部分）が素材としてブレンドされ、創造的に再利用される。そこから示唆される言語の姿は、そのほとんどすべての側面に慣習化された意味と用法を持つイディオム的表現が入り込んでいるというものとなる。

個別の語彙に関する慣用的な用法とその組み合わせに焦点化し、それらを複合的なネットワークとして分析対象とするという本研究におけるアプローチは、言語使用における創造的な逸脱が容認されていくプロセスを、文法理論において正当に位置づけるために、今後さらに多様な事例の分析に広く適用し、検証していく価値のあるものであると考えられる。

〈引用文献〉
Boas, Hans C. (2003) *A constructional approach to resultatives*, CSLI Publications.
Fauconnier, Gilles and Mark Turner (2002) *The way we think: Conceptual blending and the mind's hidden complexities*. Basic Books.
早瀬尚子 (2008)「形容詞か副詞か？—副詞としての形容詞形とその叙述性」『認知言語学論考』 8, 125-155.
Horton, Bruce (1996) What are copula verbs. In Eugene H. Casad, ed., *Cognitive Linguistics in the Redwoods*. Mouton de Gruyter, 319-346.
井本亮 (2009)「日本語結果構文における限定と強制」小野尚之 (編)『結果構文のタイポロジー』, 267-313, ひつじ書房.
Isaacson, Walter (2011) *Steve Jobs*. Simon & Schuster.
Iwata, Seizi (2006) Argument resultatives and adjunct resultatives in a lexical constructional account: The case of resultatives with adjectival result phrases, *Language Science* 28, 449-496.
Killie, Kristin (2007) On the development and use of appearance/attribute adverbs in English. *Diachronica* 24-2, 327-371.
宮腰幸一 (2009)「日英語の周辺的結果構文—類型的含意」小野尚之 (編)『結果構文のタイポロジー』, 217-265, ひつじ書房.
西村義樹・長谷川明香 (2016)「語彙, 文法, 好まれる言い回し—認知文法の視点—」藤田耕司・西村義樹 (編)『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ：生成文法・認知言語学と日本語学』 開拓社, 282-307.
Pinker, Steven (2014) *The sense of style: The thinking person's guide to writing in the 21st century.* Allen Lane.
谷口一美 (2005)『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 ひつじ書房.
Taylor, John (2012) *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford University Press. **[西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫（編訳）『メンタル・コーパス 母語話者の頭の中には何があるのか』 くろしお出版]**
Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.
安井稔 (1976) **『新しい聞き手の文法』 大修館書店.**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① Toru Suzuki (2017) "Spurious Resultatives Revisited: Predication Mismatch and Adverbial Modification,"『山形大学人文学部研究年報』第 14 号, 69-104.
② 鈴木亨（2016）「'Think different'から考える創造的逸脱表現の成立」菊地朗他（編）『言語学の現在を知る 26 考』, 241-253, 研究社出版.
③ Toru Suzuki (2016) "Review: Interpreting Motion: Grounded Representations for Spatial Language," *English Linguistics* 32:2, 432-441.
④ 鈴木亨（2015）「創造的逸脱表現の認可をめぐって」『日本英文学会第 87 回大会 Proceedings』118-119.

〔学会発表〕（計 3 件）

① 鈴木亨（2017）「創造的逸脱表現を支える文法のしくみ－Think different の周辺」, 津田塾大学言語文化研究所「英語の通時的及び共時的研究の会」（講演）, 津田塾大学, 2017 年 12 月 9 日.
② 鈴木亨（2016）「創造的逸脱表現の文法と意味解釈−Think different の周辺から」, 成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究」（講演）, 成蹊大学, 2016 年 7 月 17 日.
③ 鈴木亨（2015）「創造的逸脱表現における動詞補部の解釈−Think different の構文分析から」, 日本英語学会第 33 回大会特別公開シンポジウム「日本の英語学研究者と語彙意味論研究」（講師）, 関西外語大学, 2015 年 11 月 21 日.

〔図書〕（計 1 件）

① 菊地朗・秋孝道・鈴木亨・富澤直人・山岸達弥・北田伸一（編）(2016)『言語学の現在を知る 26 考』, 研究社出版.

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　亨　（SUZUKI Toru）
山形大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：70216414